

内容見本

1 ああーあか

ああ	阿阿	133	あか	赤川因幡守元忠	619
あい	相合・相生（安芸高田郡吉田）	4 126 127 141 146 147 560	あか	赤川勘解由広義家説	59 620
あい	相生四郎元綱	1 27 28 51 52	あか	赤川源左衛門尉元久（もと又二郎元吉）	
あお	あを（豊前）	672	あか	赤川左京亮元助	103 128 223 342 368 370 390 397 447 489 490 609 659
あお	青景右京進隆著	160 172 182 197	あか	赤川左京亮元保	22 49 103 106 118 124 132 138 397 402 404 417 419
あお	青景越後守隆著	53 54 208 226 227 232 251 252 256 259 279 295 394	あか	赤川十郎左衛門尉就秀	188 189 191 272 342 348 368 370 380 384 390 393 397 402 404 417 419
あお	青木小三郎繁之	28	あか	赤川十郎左衛門尉元秀	38 49 59 61 63 131 134 136 390 397 448 463
あお	青木五郎太郎	29	あか	赤川十郎左衛門助安家	568 592
あお	青木太郎左衛門	172 173	あか	赤河二郎三郎	133 189
あお	青ノ鼻（安芸高田郡吉田）	4	あか	赤川仁右衛門広義家証文	
あお	青ノ町（安芸高田郡吉田）	4 149	あか	赤川半兵衛周昭家証文	63 131 151 189 253 254 367 370 446 452
あお	青海苔（安芸佐西郡厳島）	380 393 401	あか	赤川又五郎元秀	141 151 152 157 189 191 253 254 367 370 575
あお	青光井（安芸高田郡吉田）	125 166	あか	赤川又左衛門尉元徳	59 619
あお	青屋城（因幡気多郡）	70 72	あか	赤川又三郎	
あお	青屋某	42 45	あか	赤川又七郎元之	106 132 138 141 142 146 164 464 585
あお	青屋入道	70 72	あか	赤川又次郎元吉（のち源左衛門元久）	128 129 130 132 141 147 165 537
あお	青山（安芸高田郡吉田）	3 113 116 117 125 126 130 131 133 137 147 255			
あか	赤川某	27 88 237			

閥閥録の編者永田政純が、根本史料を駆使して、世に流布する諸軍記の一字一句を痛烈に批判した萩藩実証史学の粹

限定七百部 番号入

毛利元就 軍記考証 新裁軍記

田村哲夫校訂

マツノ書店

相杜(房)若狭入道殿
同 右京亮殿
小方(元應)對馬守殿 御返報

老翁記云長屋記發内 元就公須々万要害ヲ切崩シ玉ヒケレハ、其響ニヨツテ若山城中陶カ臣野心ヲ挟ミ、五郎長房ニ腹ヲ切セ頸ヲ公ノ陣処岩国永興寺ニ贈テ降参ス

吉田記云旧時 陶長房ハ若山城ニ拠リ元就公ト一戦シテ父ノ仇ヲ報シ、且杉治部大輔隆泰・相杜下野守按右京亮ヲ退治セントテ使ヲ山口ニ遣シ援兵ヲ乞ケレトモ、義長不救ケレハ長房大ニ怒リ、手勢計ニテ元就公ヲ引受、戦死セントテ待ケル処ニ自レ以下後杉伯耆守重矩後太平記作重政カ旧時記無実名、嫡子杉彈正忠後太平記作隆重旧時記作・弟七郎忠重旧時記不父伯耆守カ全薑カ為ニ殺レシ後後太平記天文廿年十月伯耆守為ニ陶被誅云々、豐前国箕按義字島ニ隠レ居シカ記無隱、全薑已ニ戦死シケレハ不及力、セメテハ長房後太平記作ヲ討テ父ノ仇ヲ報スヘシトテ、弘治二年二月廿二日旧時記不若山ニ攻入ケレハ城兵不能防、長房城ヲ逃レ出長尾按總字ノ龍文寺ニ至テ切腹ス旧時記作長房於城中自殺弟小次郎逃出城中、杉隆重旧時作長房ノ頸ヲ以岩国ノ御陣処ニヲクリケレハ、元就公後太平記不・隆元公感悦シ玉ヒ、前代ノ旧領豊前都郡ヲ賜リケル

陰德記云、陶全薑相良武任カ權威ヲ妬ムヨリ事起リ、義隆ヲ弑シ其跡ヲ匿ン為ニ跡ナキ科ヲ負セテ杉伯耆守重政重矩之ヲ殺ス、重政カ子杉十郎重輔・同彦七今ハ長房ヲ討テ父ノ仇ヲ報スヘシトテ其由ヲ義長ニ訴ヘ、返答ヲ不待弟彦七・同次郎左衛門等ト同ク天

文廿四年閏十月六日山口ヲ發シ、翌七日富田若山城ニ攻入、長房失利、切腹ス、重輔遣使、長房カ頸ヲ元就公陣処岩国永興寺ニ送ル、此時長房カ弟小次郎ハ城ヲ出テ龍文寺ニ逃行、翌弘治二年正月三日切腹ス、全薑カ末子鶴寿丸ハ内藤隆世ヲ頼テ杉カ後河原ノ館ヲ囲ム、義長ノ居間ニテ杉・内藤一旦和睦スト雖、内藤變約、弘治二年三月四日杉カ籠リタル宝寿院ニ攻入重輔戦死、重輔弟彦七人質トシテ内藤カ処ニ在シヲ隆世誅殺ス吉田記長屋記旧時 若山落城ノ後、長房カ臣ノ降参セシ者ヲ遣シ置玉ヒ、長屋小次郎按元ヲ番頭トシテ城ヲ守シム、然処ニ山口ヨリ毛利与三按与三此時属毛利家、天文廿三年五月十二日山口御手切条下駁之、且弘治三年連判有・野上旧時記作内蔵助兵ヲ帥来テ城ヲ囲ム、降兵反忠ヲ致シ城中ニ火ヲ放チ忽城陥ル、然トモ陶カ臣野田・寺田ヲハ城番ノ者討果シ、毛利・野上ヲ追払ヒ城破却セラル陰德記云、長屋小次郎ハ野田・寺田ヲハ討ケレトモ、敵大勢ナレハ可難、防トテ城ヲ明テ岩国ニ行、元就公ハ山口勢若山ヲ囲ムト聞玉ヒ、後詰トシテ熊谷・天野ヲ遣スヘシト評議セラレケレハ、毛利与三・野上内蔵助其由ヲ聞、若山城ヲ棄テ山口ニ帰ル龍文寺証文云

龐英洪公大禪定門 晴賢嫡男長房、天文廿四乙卯十月七日於矢地若山死

月光阿三禪公子 靈簿六日下記鶴千代丸、不記年月、伝説是弘治二正月三日十四歳於龍文寺自殺、長房弟也

論断

按、若山合戦感状不伝、月日的ニ記ス者ナシ、諸軍記ノ説難信用、故ニ不取、証文

粉骨之趣無申計候、何も別而可申聞候、猶此者可申候、謹言

(弘治二)
二月十四日

隆元判

羽仁藤次郎殿

論断

按、羽仁家ノ証文ヲ考ルニ、柵笠ノ賊徒蜂起シケルニ柵杜隆康此時既ニ来属シ賊徒ヲ退治ス、羽仁藤次郎等モ一同ニ働キ敵ヲ討捕タルト見タリ

日本、破賊徒、于山代成君寺（玖珂郡）

此戰、隆元公感状ヲ賜于今伝之者、三戸新兵衛有次敵ヲ討取（今三戸忠左衛門將次家）

参考

三戸忠左衛門將次家証文

今度成君寺仕崩之時、三戸新兵衛其方隨身候て辛勞仕、剩敵討捕候、誠心懸馳走之至神妙祝着候、何も別而可褒美候、此由能々可申聞候、謹言

(弘治二)
二月十七日

隆元判

(元通)
栗屋縫殿允殿

論断

按、成君寺ニ賊徒楯籠リタルコト栗屋新左衛門家ノ証文（見前段討山代賊徒之条下）

隆元公二月九日ノ

御書ニ、敵モ成君寺ニ相ひかへ候ト有之、然時ハ二月九日頃ヨリ賊徒等成君寺ニ籠リシヲ同十七日マテノ間ニ擊破リタリ

三月十一日

三月十一日擊山代（郡同）賊徒

山代ノ賊屢起リケル処ニ、栗屋右京亮元信働ヲ以テ要害ヲ保守シ、剩三月十一日敵悉ク切崩シ、五十余人ヲ討取、残ル地下人悉ク降伏シ人質ヲ出シケル

参考

栗屋七郎右衛門武信家証文

尚々此間之心遣之程、爰元にて推量候計候

態申遣候、今度其表之儀難儀之至候処、其方有相堅固ニ申付、敵動之時分持拔、剩去十一日敵悉切崩、五十余人討捕候、無比類段中ノ申も疎候、以此儀其口競、此事本望之至候、殊其地下人質等取置、柵杜（江城衆指籠、種々心遣之段無申計候、此等之趣早々可申遣候処、石州表取乱不及沙汰候て遅々候、心外候、呉々今度其方有相候て心遣堅固之段、祝着此事候、尚以面之時可申候、謹言）

(弘治二)
三月十五日

元就判

栗屋右京亮殿

論段

按、此合戰諸軍記ニ載セス、特リ栗屋家ノ証文ニ、十一日敵悉切崩五十余人討捕、殊ニ地下人質等取置ト有之、是レハ山代賊徒ヲ討ツコトナリ、地下人ト有之ルハ山代ノ地下人ナリ、最証文ニ戰ノ場ヲ記サザレドモ、山代ト極ルコトハ此証文内ニ柵杜エ兵ヲ籠ルコトヲ載セラレタレハ、皆弘治二年春玖珂郡乱ノ事ナレハナリ



戦国時代史研究の飛躍的な発展

元広島大学文学部長 松岡 久人

この『新裁軍記』は永正十四年（一五一七）十月から永禄六年（一五六三）年末に至る間の、毛利家の編年体の歴史書である。元文三年（一七三八）十一月に着手され、寛保五年（一七四一）五月に元就時代分の大部分が完成を見ている。

わが中国地域の戦国時代を概観すると、安芸武田氏の伝統的支配に対する毛利氏の反撃、山陰の雄族尼子氏の中国山地を越えて備後安芸方面への侵略と大内氏による毛利氏等への軍事的支援、大内氏による尼子氏本拠地富田への大遠征、陶晴賢の大内義隆弑逆と厳島の戦、元就の防長統一、豊前方面での毛利・大友の抗争、毛利氏の石州諸豪族経略と尼子氏攻撃等々、まさに戦国の名にふさわしい軍事行動の連続であって、その間に数多くの智将勇兵のめざましい活躍が見られた。

これら多くの軍事行動と、その間における名将・勇士の活躍は、当代を生き抜いた人々の語り草であっただけでなく、後代の人々にとっても興味尽きぬ話の泉であつたらしい。そこから、近世になって『吉田物語』や『陰徳太平記』などの軍記が編み出され、世に広まっていた。元和偃武ののち、平和の到来とともに軍記物への需要の高まりに応じて、広く版行による販売も採算が立つようになり、この『新裁軍記』巻一にも、寛文のころ浪人・僧侶が相はかつて、毛利家の軍記という触れ込みで、大坂において『関西記』という軍記を版行した話を載せている。本書が『新裁軍記』と命名された背景には、それら世にはびこる軍記類の興味本位とも見られかねない内容に対する批判の意味が込められていると思われる。

本書の内容を一言を以て言えば、世に膾炙し流布する興味本位とも評される軍記物の内容に対して、御家蔵文書、現在の『毛利家文書』を始め『関関録』や、それと同時期の編集になる『寺社証文』等に所収の、藩士・寺社・百姓等より撰出された、当該時代の一等史料たる古文書の博搜・分析を通して得られる客観的史実を対置し、「誤謬ヲ去テ実説ヲ記スル」ものである。それはまさに近代歴史学の目ざす実証主義と符合するものといえよう。

明治以降確立されてきた近代歴史学における本書の処遇ないし利用状況について見てみよう。東京大学史料編纂所の前身である史料編纂係は『大日本史料』の稿本作製するにあたって、その綱文と典拠史料名を集めた『史料綜覧』を編集した。同書はその後刊行され、『大日本史料』の未刊の年代については、研究者に広く利用されていることは周知のところであろう。同書のうち例えば永正十四年十月二十二日の条には、「安芸武田元繁、同国今田城ニ拠リ、吉川経基ノ属城有田城ヲ攻ム、毛利元就、自ラ同城ヲ援ケ、是日、元繁敗北ス、」という綱文を立て、その典拠史料を列挙しているが、その中に『新裁軍記』が挙げられている。『史料綜覧』にはこのほか随所に『新裁軍記』が典拠史料として引用されている。

そこで、『史料綜覧』の記載を拠り所として、『大日本史料』において該年月日の条を尋ねれば、『新裁軍記』の原文に到達できる仕組みになっているのであるが、残念ながら『大日本史料』のうちでもこの時期のものは未発行の部分が多いため、『大日本史料』によって『新裁軍記』の原文にお目にかかれるものはごく限られている。したがって多くの場合、史料編纂所架蔵の写本ないし山口県文書館の原本に頼らねばならなかった。

このたび、多年山口県文書館に勤務され、『萩藩関関録』など史料の刊行をはじめ、防長関係の歴史研究に豊富な実績を積まれた田村哲夫氏の厳密な校訂により、山口県関係の各種史料の刊行を手がけてこられたマツノ書店より、本書が刊行される運びとなった。拝見すると、原本に行書体で記された古文書類はすべて楷書体に翻刻され、初心者への配慮もなされている。

本書の発行は、前記のような状況に照らして極めて有意義なことであり、これにより、直接的には中国地域より北九州にかけての戦国時代史研究の飛躍的な発展が期待できると信ずるものである。

『新裁軍記』の成立

元山口県文書館専門研究員

田村 哲夫

長州萩藩毛利家の藩祖元就公の軍記物としては、藩政初期から私撰の覚書・物語類が多く世に出ていたが、官撰としては五代藩主吉元公が享保九年（一七二四）に史官永田瀬兵衛政純と徳田幸助良方の二人に命じて家門の系譜を撰修せしめられた。

これが二十四年を経て献上された『江氏家譜（三冊）』である。ついで、元就公の行実を編年体の『御軍記（六冊）』として、御内用掛（のち密用方）の永田政純を主任に、山県庄助（周南）・小田村文助（郵山）・小倉彦平（鹿門）・山根七郎左衛門（華陽）に編集せしめられた。元文三年（一七三八）のことで、寛保五年（一七四一）に完成した。これが後の『新裁軍記』であり、当藩における官撰の編年史の初めである。

山口県文書館の毛利家文庫目録・軍記類3『新裁軍記』の解題文によると「十二巻途中までは前記『御軍記』と略々同内容。体裁も同じで綱文のもとに概説し、典拠の史料を掲げて論断を加えている。全編の体裁や写相などから見て稿本と思われる。十五巻以下には中題に稿の字が加えてある。所々に付箋があるが、その筆蹟は永田政純のようで、前掲の『御軍記』を改訂増補し新裁したもの。」という。

『もりのしげり』の旧長藩職役一覧表に「新裁軍記掛 文政三年六月二十九日中村九郎兵衛（後篇書繼ヲ命ス）」と見える。文政三年（一八二〇）に書繼ぎを命ぜられた中村九郎兵衛（名は敬。華嶽と号す）は藩主の侍講より明倫館学頭となる。天保七年（一八三六）死去しているが、後編とは何巻目からか、その終功年代も不明である。

本書を出版するに際し、原題の『新裁軍記』のままで一般に周知されていないことを思い、敢えて副題として「毛利元就軍記考証」の語を添え、本書の内容を表さんとした次第である。（本書「あとがき」より）

■本書『新裁軍記』はとくに刊行されていなければならぬ根本史料なのに、なぜこれまで活字化されませんでした。

■今回も極小部数の限定出版です。なるべく「予約特価」でお求め下さい。また県外のお知り合いの研究者にもご吹聴のほど、よろしくお願い申し上げます。

■体裁 A5判八二〇頁

■定価 クロス装製・箱入

■予価 二〇、〇〇〇円

■特価 一六、〇〇〇円（〒520）

■特典 『防長文化史雑考』も同時予約のばあい、両方で二万円（〒共）にサービス

■締切 92年二月十日 厳守

■発売 92年四月上旬 予定

■限定七百部（番号入）

▼分割・ボーナス払いに応じます。

▼書店には卸しません。

▼売り切れのばあいはご容赦下さい。

山口県徳山市銀座一の三
マツノ書店
TEL 083-442-2955
FAX 083-442-2955

家康・秀吉が範とした「不倒翁」七十五年の生涯